
プロジェクト報告

ナショナル・シアター・ライブ 5周年記念シンポジウム報告

狩 野 良 規

2018年7月21日(土)に青山学院大学国際研究センター主催の「ナショナル・シアター・ライブ5周年記念シンポジウム」を開催した。3時間半の長丁場、猛暑の日にもかかわらず本多記念国際会議場に約350名の聴衆が集まる盛況で、熱気にあふれた1日であった。以下にその概要を記す。

1. プログラム

ナショナル・シアター・ライブ5周年記念シンポジウム

主催：青山学院大学国際研究センター

協力：カルチャヴィル

日にち：2018年7月21日(土) 12：30開場，13：00開始，16：30閉会

第1部 ナショナル・シアター・ライブ，映像放映

第2部 ナショナル・シアター・ライブの裏話を聞く

中村未知子（カルチャヴィル代表）

兵藤あおみ（演劇ライター）

聞き手 井上 優（明治大学准教授）

第3部 ナショナル・シアター・ライブの回顧と展望（パネルディスカッション）

河合祥一郎（東京大学大学院教授）

青木 豪（劇作家，演出家，明治大学兼任講師）

柏木しょうこ（映像翻訳家）

司会 井上 優

会場：青山学院大学本多記念国際会議場（17号館 6 階）

2. 第1部 映像放映

3 部構成のシンポジウムの第1部は、ロンドンのナショナル・シアター（National Theatre, 略称 NT）50周年を記念するイベント（2013年）の映像を見てもらった。

3. 第2部 ナショナル・シアター・ライブの裏話を聞く

ナショナル・シアター・ライブ（NT ライブ）配給会社カルチャヴィル代表の中村未知子（以下、登壇者の敬称略）と NT ライブの劇場公開時パンフレットの編集を担当している兵藤あおみに、もろもろの裏話を聞いた。

まず、日本への NT ライブ導入が順調に滑り出したいちばんの理由は、最初の作品に人気絶頂のベネディクト・カンバーバッチ主演『フランケンシュタイン』を選んだことだった。大雪の降る日、六本木ヒルズの TOHO シネマズが超満員になった日のことは忘れられない。

上映する演目はどうやって選択するか。映画界でも活躍している俳優が出演している作品は劇場側にも、また観客にも受け入れられやすい。しかし、上演時間が第1部・第2部を通せば7時間以上という大作『エンジェルズ・イン・アメリカ』や、地味ながら女性が主人公の味わい深いラティガンの芝居『深く青い海』など、ロンドンで真に評判をとっている舞台をできるだけ紹介していきたい。

また、アンコール上映は、上映権の問題もあるので複雑だが、やはりファンの声と観客の動員しだいである。主催者側も宣伝に努力しているが、皆様もツイッターその他でファンの声をぜひお聞かせいただきたい。

4. 第3部前半 ナショナル・シアター・ライブの回顧と展望

今回の登壇者は、単に観客代表というよりも、自らも演劇や字幕の制作現場にたずさわっている3氏にお願いし、舞台の裏側も想像しながら批評していただいた。

青木豪は、売れっ子の劇作家にして演出家。2012～13年には文化庁の派遣でロンドンに1年間滞在しており、NT ライブで上映された芝居も、現地で生の舞台を何本も見て

いる。彼にこれまで日本で上映された NT ライブ全27作品の中から5本を選んで批評してもらった。

青木の挙げる No.1は『リア王』。現在のロンドン演劇界で第一人者のひとり、サイモン・ラッセル・ピール主演、リア王は認知症という設定で、現代的な舞台に仕上がっている。また、デヴィッド・ヘアー作『スカイライト』は出演者3人だけの会話劇。日本だと密室の室内劇にしてしまうところだが、背景に集合住宅のセットを組み、外の世界との風通しをよくして、社会性をもたせた発想が素晴らしい。

『橋からの眺め』は、今、舞台を作るたびに話題を呼んでいるイヴォ・ヴァン・ホーヴェ（トネールフループ・アムステルダム）の演出。ほとんど裸舞台で、しかしラストは「怒涛の寄り身の血の雨地獄」、アーサー・ミラーの芝居をこうやってエンタメにしているんだ。ハロルド・ピンターの不条理演劇『誰もいない国』は、昔から何回読んでもさっぱりわからなかった戯曲だが、それをこうまでわかりやすく上演できるんだと感激した。

『アマデウス』は、芝居に若手オーケストラ団員20名を絡ませて、見事。歩きながら鉄琴を弾く人、寝っ転がりながらバイオリンを演奏する人。よくもこんな舞台が作れたものだ。

柏木しょうこは、NT ライブの字幕監修を担当しており、シンポジウムに参加した聴衆は彼女の字幕作成の苦労話にたびたび頷いていた。

NT ライブの字幕は、そもそもロンドンで作成され、日本側はそれを修正できないと、最初から契約で決められていた。しかし、柏木によれば、日本の字幕は「ガラパゴス」、特殊な進化を遂げており、世界最高峰のレベルだという。つまり、海外の字幕はあくまで補填情報であり、たとえば国際映画祭などでも、批評家・観客とも“映像”を楽しみ、字幕はあくまでそれを補足する役割しか担っていない。だが、日本の字幕文化は、作品の内容を理解するとともに、「頭の中で英語を日本語に吹き替えさせる」、「読んでいるのに読んでいることを忘れる字幕を善しとし、そのために字幕を出すタイミングも秒単位で細かく決められている」と。

そうした繊細な日本の字幕へのこだわりがロンドンに伝わったこともあり、ある時期から日本側の手直しが許されるようになり、柏木が監修という形で参加するようになった。

また、字幕は映画と演劇で驚くほど異なる。映画は前述のとおり映像が中心、しかし演劇は役者中心で、人間のエネルギーや感情や表情が鑑賞のしどころとなる。映画はスクリーンに映された“絵”が語っているから「これ」と訳せばいいところを、舞台では“もの”がない、セリフでものを想像させるわけだから、字幕も必然的に詳しくしなけ

ればならない。どうやって字幕を人間の感情とリンクさせていくか、役者の発話のリズムと字幕をどうシンクロさせていくか。感情だけでなく、セリフの余韻をいかに字幕で汲み取るか。

NT ライブは映画ではなく、やはり演劇であると実感している。

東京大学大学院教授の河合祥一郎も研究だけでなく、Kawai Project を主宰し、自ら演出にたずさわっている。また、6 年間にわたるイギリス留学中、ロンドンの舞台も数多く鑑賞している。

河合の選んだ NT ライブの第 1 位は『オセロ』。エイドリアン・レスター（オセロ役）とロリー・キニア（イアーゴ役）の演技が絶品。『オセロ』は軍隊内部の話、上官と部下の関係性がひとつの鍵になる。ニコラス・ハイトナーの演出はそれを的確に抽出していた。

『エンジェルズ・イン・アメリカ』はアメリカの苦悩を描いた戯曲がすばらしい。NT の舞台は空間を上手に使っており、人物たちの心理と巧みにリンクさせている。アンドリュー・ガーフィールドはベストキャストだった。

『オーディエンス』は、エリザベス女王に扮したヘレン・ミレンに存在感があった。『誰もいない国』は、台本を読んだだけでわかる人はすごい。ピンターは“全部”を書いていないからだ。そんな裏読みの必要なセリフの行間を、イアン・マッケランとパトリック・ステュアートはすべて埋めていて、観客は「当然そうなるしかないよね」と思わされてしまう。

青木が絶賛した『リア王』にはクレームをつけた。痴呆症の解釈は安易だ、古い王の權威にすがろうとするリア王の世界が、それでは矮小化されてしまう、と。

こういうシンポジウムは、識者の間でも同じ作品に対する見方や解釈が異なる、その理由を議論し合うところに醍醐味がある。

5. 第 3 部後半 質疑応答

会場の聴衆には、あらかじめ質問用紙が配布され、講演と休憩の間に、NT ライブに関する質問を書いてもらった。シンポジウム最後の 1 時間は、この日の登壇者全 5 名が、それらの質問に「マシガンのように」（司会者）答えていく Q&A。

川崎の映画館にはあまりお客さんが入っていない、このまま NT ライブを続けられるか心配だとの質問（会場から笑い）——都内と地方で状況が異なる。TOHO シネマズ日本橋は、演劇界の人たちもよく見に来てくれて、盛り上がっている。だが、地方は苦

戦している。皆で友だちを誘って見に行き、ネズミ講式にファンを増やしていきましょう（笑い）。

1本あたりの上映権料はいくらか？（笑い）——NTや権利元がずいぶん持っていく。「カルチャヴィルは安泰ですね」とよく言われるが、いやいや「毎日雑巾のように働いている」と中村（爆笑）。

NTライブのDVDは発売されないのか？——NTはDVDを作らない方針をとっている。あくまでロンドンの劇場に足を運べない人たちに、できるだけ生の舞台に近い感覚で鑑賞してもらうための手段として映像を使っている。だから、大きなスクリーンと上質な音響設備を有する映画館で見ってもらうシステムを固守したい。何でも手に入りやすい時代になったからこそ、わざわざ時間を作って劇場や映画館まで足を運ぶ楽しさを知ってほしい、と。

字幕翻訳家になるにはどうしたらいいかという、学生からの切実な質問。字幕や吹き替えには厳密なルールがあるから独学は難しい、専門の学校に通った方がいい。ただし、その後は、「私は翻訳が好きで、翻訳を勉強していると、いろいろな人に言ってください」、「どこかで誰かが1回はチャンスをくれる。それが自分の思ったチャンスでなくても、それをまず受ける、そこから次のチャンスが広がっていく」と、柏木の情熱のこもったアドバイス。

俳優のトレーニングについて。イギリスではどこの演劇学校でも、これとこれはやるんだという必須科目がある。俳優たちがテクニックを共有しているのは、羨ましい。半面、ものすごく奇抜なものは出づらい、日本の小劇場には時々天才がいる、と青木。

演劇鑑賞初心者にNTライブを見る時のポイントを？——河合が答えて、「芝居は基本的に、まったく無条件に面白いと思ってもらえるように作っている。つまらなかったら、作り手の失敗だ」、「だから、初心者も上級者も区別はない。ただし、鑑賞後にもっと知りたいと思ったら、戯曲を読み返すなり、もう1度見直すなりしてほしい」と。

「イギリスで芝居を見て嬉しくなったのは、あっちでもけっこう失敗作があること。全部面白いわけではない。NTライブは選りすぐりなんだ」（青木）。

NTライブは本国ではどれくらい普及しているのか。兵藤が答えて、年々上映館は増えている。カンバーバッチ主演の『ハムレット』の大ヒットがターニング・ポイントだった。イギリスおよび時差のないヨーロッパの国々には、公演後半のある木曜日にカメラが入って、ライブで配信する。字幕を付けたり、時差のある国は、後日の放映になる。日本のように1週間見ることができるのは、かなり異例だ。

その他、多くの質問と登壇者の的確な答えが続き、最後に中村が、「ファンに支えられて、気がついたら5年になっていた。これからもNTライブを末永く上映していきた

い」と締めくくった。

6. 参考：NT Live in Japan (TOHO CINEMAS), この5年間の上映作品

2014年

1. 『フランケンシュタイン』(2月): *Frankenstein*, NT Olivier 2011, 原作=メアリー・シェリー, 脚本=ニック・ディア, 演出=ダニー・ボイル, 出演=ベネディクト・カンバーバッチ, ジョニー・リー・ミラー
2. 『コリオレイナス』(4月): *Coriolanus*, Donmar Warehouse 2014, 作=W.シェイクスピア, 演出=ジョシー・ルーク, 出演=トム・ヒドルストン
3. 『ザ・オーディエンス』(6月): *The Audience*, Gielgud Theatre 2013, 作=ピーター・モーガン, 演出=スティーヴン・ダルドリー, 出演=ヘレン・ミレン
4. 『リア王』(8月): *King Lear*, NT Olivier 2014, 作=W.シェイクスピア, 演出=サム・メンデス, 出演=サイモン・ラッセル・ビール
5. 『ハムレット』(10月): *Hamlet*, NT Olivier 2010, 作=W.シェイクスピア, 演出=ニコラス・ハイトナー, 美術=ヴィッキー・モーティマー, 出演=ロリー・キニア
6. 『オセロ』(12月): *Othello*, NT Olivier 2013, 作=W.シェイクスピア, 演出=ニコラス・ハイトナー, 美術=ヴィッキー・モーティマー, 出演=エイドリアン・レスター, ロリー・キニア

2015年

1. 『ザ・オーディエンス』(1月, アンコール)
2. 『欲望という名の電車』(3月): *A Streetcar Named Desire*, Young Vic 2014, 作=テネシー・ウィリアムズ, 演出=ベネディクト・アンドリュース, 出演=ジリアン・アンダーソン
3. 『二十日鼠と人間』(5月): *Of Mice and Men*, Longacre Theatre (Broadway) 2014, 作=ジョン・スタインベック, 演出=アンナ・D・シャピロ, 出演=ジェームズ・フランコ, クリス・オダウド
4. 『スカイライト』(7月): *Skylight*, Wyndham's Theatre 2014, 作=デヴィッド・ヘアー, 演出=スティーヴン・ダルドリー, 出演=キャリー・マリガン, ビル・ナイ
5. 『宝島』(9月): *Treasure Island*, NT Olivier 2015, 原作=R.L.スティーヴンソン, 脚本=ブリオニー・ラヴェリー, 演出=ボリー・フィンドレイ, 出演=パッツィ・フェラン, アーサー・ダーヴィル
6. 『オセロ』(10月, アンコール)
7. 『リア王』(11月, アンコール)

2016年

1. 『ハムレット』(1月): *Hamlet*, Barbican Theatre 2015, 作=W.シェイクスピア, 演出=リンゼイ・ターナー, 出演=ベネディクト・カンバーバッチ, キーラン・ハインズ, コブナ・ホールドブルック=スミス
2. 『夜中に犬に起こった奇妙な事件』(2月): *The Curious Incident of the Dog in the Night-Time*, NT Cottesloe 2012, 原作=マーク・ハッドン, 脚本=サイモン・ステイーヴンス, 演出=マリアン・エリオット, 出演=ルーク・トレッダウェイ

3. 『橋からの眺め』(4月): *A View from the Bridge*, Wyndham's Theatre 2015 (初演 YoungVic 2014), 作=アーサー・ミラー, 演出=イヴォ・ヴァン・ホーヴェ, 出演=マーク・ストロング
4. 『人と超人』(7月): *Man and Superman*, NT Lyttelton 2015, 作=ジョージ・バーナード・ショー, 演出=サイモン・ゴドウィン, 出演=レイフ・ファインズ
5. 『ハード・プロブレム』(9月): *The Hard Problem*, NT Dorfman 2015, 作=トム・ストッパード, 演出=ニコラス・ハイトナー, 出演=オリヴィア・ヴィノール
6. 『戦火の馬』(11月): *War Horse*, New London Theatre 2014 (初演 NT Olivier 2007), 原作=マイケル・モーパール, 脚本=ニック・スタフォード, 演出=マリアン・エリオット, トム・モリス

2017年

1. 『ハンゲメン』(4月): *Hangmen*, Wyndham's Theatre 2016 (初演 Royal Court Theatre 2015), 作=マーティン・マクドナー, 演出=マシュー・ダンスター, 出演=デヴィッド・モリシー, ジョニー・フリン
2. 『三文オペラ』(6月): *The Threepenny Opera*, NT Olivier 2016, 脚本=ベルトルト・ブレヒト, 音楽=クルト・ヴァイル, 演出=ルーファス・ノリス, 出演=ロリー・キニア, ロザリー・クレイグ
3. 『深く青い海』(7月): *The Deep Blue Sea*, NT Lyttelton 2016, 作=テレンス・ラティガン, 演出=キャリー・クラックネル, 出演=ヘレン・マックロリー
4. 『誰もいない国』(9月): *No Man's Land*, Wyndham's Theatre 2016, 作=ハロルド・ピンター, 演出=ショーン・マサイアス, 出演=パトリック・ステュワート, イアン・マッケラン, オーウェン・ティール
5. 『お気に召すまま』(10月): *As You Like It*, NT Olivier, 2015, 作=W.シェイクスピア, 演出=ボリー・フィンドレイ, 美術=リジー・クラチャン, 出演=ロザリー・クレイグ, パッツィ・フェラン
6. 『一人の男と二人の主人』(11月): *One Man, Two Guvnors*, NT Lyttelton 2011, 原作=カルロ・ゴルドーニ, 脚本=リチャード・ビー, 演出=ニコラス・ハイトナー, 出演=ジェームズ・コーデン
7. 『ヘッダ・ガーブレル』(12月): *Hedda Gabler*, NT Lyttelton 2017 (初日2016), 作=ヘンリック・イブセン, 上演台本=パトリック・マーバー, 演出=イヴォ・ヴァン・ホーヴェ, 美術・照明=ヤン・ヴァースウェイヴェルド, 出演=ルース・ウィルソン

2018年

1. 『エンジェルス・イン・アメリカ 第一部 至福千年紀が近づく』(2月): *Angels in America Part 1: Millennium Approaches*, NT Lyttelton 2017, 作=トニー・クシュナー, 演出=マリアン・エリオット, 出演=アンドリュー・ガーフィールド, ネイサン・レイン
2. 『エンジェルス・イン・アメリカ 第二部 ペレストロイカ』(3月): *Angels in America Part 2: Perestroika*, NT Lyttelton 2017, 作=トニー・クシュナー, 演出=マリアン・エリオット, 出演=アンドリュー・ガーフィールド, ネイサン・レイン
3. 『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』(5月): *Rosencrantz & Guildenstern Are Dead*, Old Vic 2017, 作=トム・ストッパード, 演出=デヴィッド・ルヴォー, 出演=ダニエル・ラドクリフ, ジョシュア・マグワイア, デヴィッド・ヘイグ
4. 『アマデウス』(7月): *Amadeus*, NT Olivier 2017 (初日2016), 戯曲=ピーター・シェーファー,

演出=マイケル・ロングハースト, 出演=ルシアン・ムサマティ, アダム・ギレン, トム・エッデン

5. 『イエルマ』(9月): *Yerma*, Young Vic 2017, 作=フェデリコ・ガルシア・ロルカ, 上演台本・演出=サイモン・ストーン, 出演=ビリー・バイパー
6. 『フォリーズ』(10月): *Follies*, NT Olivier 2017, 脚本=ジェームズ・ゴルドマン, 音楽=スティーヴン・ソンドハイム, 演出=ドミニク・クック, 出演=イメルダ・スタウトン, トレイシー・ベネット
7. 『ヤング・マルクス』(11月): *Young Marx*, Bridge Theatre 2017, 作=リチャード・ビーン, クライヴ・コールマン, 演出=ニコラス・ハイトナー, 出演=ロリー・キニア, オリヴァー・クリス
8. 『ジュリアス・シーザー』(11月): *Julius Caesar*, Bridge Theatre 2018, 作=W.シェイクスピア, 演出=ニコラス・ハイトナー, 出演=ベン・ウィショー, デヴィッド・モリッシー, デヴィッド・カルダー, ミシェル・フェアリー